

佐保川わいわい桜祭り レポ

◇桜ちらほら 店満開◇

鈴木 未一

佐保川わいわい桜祭りは、2019年以降コロナ禍や天候不順のため、4年間にわたり開催されなかったが、コロナ禍もほぼ収束し陽春の陽射しに恵まれた3月30日(土)、予定通り開催された。当会も通算7回目の参加をした。

前日、8人のスタッフが食材の買い付けと下ごしらえに奮闘。前回途中で食材などの買い付けに二度三度、うれしい悲鳴を上げたことから今回は多めに用意した。

前回までの経験と久しぶり開催なども考慮して、食品バザーは定番の「焼きそば」に新しく「玉茘蕪」の二品、そして、自然工作部門では、「数珠玉ブレスレット」と「紙トンボ」での出展とした。

例年であれば佐保川の桜はほぼ満開に染め尽くされるところだが、今年は3月に入っても気温が低く、全国的に1週間ほど開花が遅れていた。しかし、久しぶりの開催と好天に恵まれて、市民の皆さんの出足は順調で、10時の開会を今か今かと待ちわびる光景が、会場のあちらこちらで見受けられた。

開店間近になると客足も順調で、16人のスタッフは各自の持ち場につき、プロ顔負けの手際よい調理とお客さんへの対応に気合いが入る。



瞬く間に店の前に5人10人と列ができ、スタッフはてんやわんやの忙しさ、休む暇もない。

以前よりも出店数が少し少なく、例年出店されていた「うどん」店がなく、その影響もあってか人気店となり、客足は途絶えることなく最大で50人ほどの長蛇の列ができた。閉店時刻が1時間繰り上げられ、食材との関係もあり、列の後尾の方々にお引き取り願わなければならないほどであった。

一方、自然工作では、小学生だけではなく、保護者の皆さんも、数珠玉ブレスレットと紙トンボ作りにチャレンジ。兄弟姉妹や友達同士で数珠玉ブレスレットの出来栄を自慢しあったり、保護者の皆さんも童心にかえって一心不乱にチャレンジされるなど、微笑ましい光景を見ることができた。また、紙トンボづくりでは、思い思いに彩色したあと、飛ばそうとするが、なかなかうまくいかない。しかし、二度三度と繰り返しチャレンジして、高く飛び上がるようになった時、「やったー」と思わず声を上げ、達成感に満面の笑みを浮かべる姿に、スタッフたちも心癒される思いであった。



16人のスタッフの皆さんには、一息をつく暇もなくお客さんへの対応に追われ、昼食をとっていただく時間もなく、完売まで頑張っていました。皆様のご尽力とご協力により、従前同様に成果を挙げることができました。そして、何よりも当会の理念の一つである地域貢献活動としてより一層定着させることができました、本当にご苦勞様でした。